

がら、自由席で開催され、多くの大学図書館職員の方々、企業図書館の方々より情報をお聞きする機会が持てたことに加えて、美味しい料理にご当地の美酒を堪能させていただきました。

2日目は、10時からの事例発表。最初に横浜薬科大学図書館 山下幸二氏の「自習環境の充実にむけた図書館づくり」は、学生中心のサービスを考え、職員シフトを組んで朝8時開館としたこと、定期試験過去問題を収集、製本して学生へ提供していること等の苦勞についての報告がされました。

2番目に、味の素(株)イノベーション研究所 長縄友子氏の「JMLA/JPLA コンソーシアムの活動状況について」の報告があり、雑誌問題、契約方法等の問い合わせには応じてくださる旨の有り難い言葉もいただきました。

事例発表の最後は、東邦大学習志野メディアセンター 吉田杏子氏の「東邦大学における外国雑誌価格高騰への対応」について、大学の概要から始まり、パッケージ価格が高くなって契約が少なくなれば出版社も大変だと思うが、東邦大学は利用動向の把握に努め、契約タイトルの選定をして個別契約およびPPVの導入により包括契約時より値下げとなった事例について報告され、11時34分に午前の部終了となりました。

お昼はランチョンミーティング、13時までの間は記録なしでテーブルごとに大学と企業が半々になるような座席配置が準備されていました。

最後のグループワークは、「薬学図書館が共同して取り組む課題は何か」を共通キーワードにA～Fの6班編成で行いました。私のグループB班は、日本大学の大谷氏をリーダーに、いわき明星大学の石井氏を書記に、昭和薬科大学の澁谷氏を発表者にと皆さん快く引き受けてくださり（本当は嫌だったのかも知れませんが）、グループ

ワークに入りました。人が集まらなくとも利用していないとは言えないのでは…、専任職員のいない図書館で良いのか…、司書がいなくても良いのか…、等々少し課題から離れたディスカッションになり発表者、記録者は頭を悩ませている様子。私も何か手助けしたかったのですが、名案が浮かばず皆さんに迷惑をおかけしたことを反省しています。そうこうしている間に発表資料作成の時間となり、14時40分～15時3分の短時間で何とかまとめることができましたが、発表内容は???。

各班5分という短時間のグループワーク発表がA班から順に行われました。各班の発表内容については、書記の方々が原稿を作成されているので、そちらを参照いただきたいと思います。

15時50分から閉会式。谷澤氏より、いくつかの要求は検討したい旨を含んだ挨拶。当番館の講評として、那須塩原ではなく東京で開催し、不自由をおかけしましたが…、たくさんの方に参集いただき感謝・感謝と結ばれました。15時56分から一人一人に修了証書が授与され、次回当番館の福山大学からの挨拶で16時3分に全日程を無事終了しました。

図書館業務に携わってから2年にも満たない私が、研究集会に参加させていただき、皆さんの話を聞いていてもチンプンカンプンの所も多くありましたが、図書館職員としてやらなければならないことを数多く教えていただくことができ、大変有意義な研修会であったことは間違いありません。記載については、私の記録違いもあるかと思いますが、その点はご了承願いたいとともに、当番館の皆様の心遣い、おもてなし、ご尽力に感謝申し上げます。

(原稿受け：2011.10.28)

## 関 口 千 登 世 (城西大学)

2011年8月25、26日の2日間にわたり、平成23年度日本薬学図書館協議会研究集会が国際医

療福祉大学東京青山キャンパスにおいて開催された。研究集会のテーマは『医療従事者の期待に応

えるために』～薬学図書館として必要な資料・情報収集～であり、講演、事例報告、ランチョンミーティング、グループワークと充実した内容のプログラムであった。

第1日目の最初は会場校の国際医療福祉大学大学院薬科学研究科教授の旭満里子先生による「医療薬学と病院・薬局実務実習」と題する講演であった。はじめに薬剤師業務の変遷について説明され、かつての帝国大学薬学科は医薬産業向け人材育成が目的であったため、日本は欧米国に比べて先進国でありながら医薬分業が後れをとってしまい、薬剤師の使命や倫理に関する薬学教育もおろそかにされがちであったことを話された。近年の医療事故の多くは薬の事故であり、pharmaceutical care が重要視される現代において安全性・経済性に責任を持って患者に対応できる薬剤師の育成が必要であることを強調された。かつて所属されていた病院薬剤部での経験を紹介され、日本語の医薬品添付文書では得られなかった医薬情報を USP-DI を使って細かく調べた結果、適切な投与方法を見つけることができ患者の痛み（苦痛）を軽減できたことを話された。このお話から、先生が強調される POS（問題を発掘できる能力）の考え方に基づいた行動と、医療チームの一員である薬剤師として何としても患者を助けたいという姿勢がひしひしと伝わり大きな感銘を受けた。これからの薬学生に必要な教育として「患者の病態や症候の理解と適正な医薬品情報の取り扱い」「医療人としての態度・倫理性およびコミュニケーション能力の向上」「医療過誤に対するリスクマネジメント能力」などを挙げられ、続いて大学のカリキュラムについて話された。国際医療福祉大学薬学部では医療を担う薬剤師としての心構えを持つために1年次から早期体験学習を実施、2年次以降も実習教育を重視しており大学と実習施設との連携が大事であると話された。

続いてのアステラスビジネスサービス(株)の横尾裕貴子氏による事例報告「ワールドワイドに展開されている研究ネットワークを支えるシステム」では、オランダ・ドイツ・アメリカの多くの拠点における研究・開発・営業に利用される電子ジャーナルや DB について話された。グローバル

契約の十分な理解や欧米の著作権への理解の大切さなど、企業ならではの事例を聞くことができた。

第1日目の最後は東邦大学習志野メディアセンター 谷澤滋生氏により「教育研修の役割と意義を考える—日本薬学図書館協議会教育研究委員会の活動をとおして—」と題する教育講演があった。はじめに協議会の状況と教育・研究委員会の活動内容について話された。研修会企画における問題点として時期、場所、内容のバランス、企業と大学との興味の格差、専任・非専任・業務委託スタッフ・派遣社員等の身分への配慮、新人への基礎研修の重要性などを話された。

第2日目は3名の事例発表からスタート。最初に横浜薬科大学図書館 山下幸二氏より「自習環境の充実にむけた図書館づくり」が発表された。シラバス掲載図書や薬剤師国家試験問題集等を1階カウンター前に配架しレファレンスに役立てていること、パソコンの増設、飲食可能なミーティングルームの開設などの取り組みを話された。中でも早朝（8時）開館の実施や定期試験過去問題集の学生への提供ではご苦労が多かったことがうかがえた。

2番目は日本薬学図書館協議会雑誌問題検討委員会 味の素(株)イノベーション研究所 長縄友子氏より「JMLA/JPLA コンソーシアムの活動状況について」が発表された。共同活動を始めたきっかけや設立時の方針、委員会の実際の仕事などについて話された。

3番目は東邦大学習志野メディアセンター 吉田杏子氏より「東邦大学における外国雑誌価格高騰への対応」が発表された。1990年代以降に電子ジャーナルの包括契約が増加しその後の値上がりに対応できなくなったことから2008年に包括契約を中止。以降、利用の多いタイトルのみを個別で契約し、それ以外の論文はPPVでの利用とした。PPV利用となったタイトルについても以前の利用実績により出版社との交渉から値下げを実現できたこと、近年の円高による余剰金でアーカイブを購入してきたことなどを話された。サービスを損ねることなくコストダウンを実現した裏側では、利用動向の詳細な調査が重要な役割を果

たしているとのこと。この話はどこの図書館でも問題となっている雑誌高騰への対策として大変参考になる事例であった。

続いてランチョンミーティングでは、6～7名が1グループとなり、リラックスした雰囲気の中で自己紹介や自館の問題点などを話し合った。筆者のグループでは3月11日の震災で大きな被害を受けた大学図書館の方がいたので震災に関連する話を中心となった。

研究集会の最後は「薬学図書館が共同して取り組む課題は何か」をテーマにしたグループワークが行われた。A～Fの6グループに分かれての作業となり、筆者のグループでは各参加者が事前に提出した研究集会参加レポートを参考にしながら、自館の状況・問題点について紹介し、それに

ついて話し合うことからテーマの答えを探っていった。各グループワークの内容は発表者のレポートをご覧いただきたい。

はじめにも書いたが、今回の研究集会は盛りだくさんの内容であり濃い2日間だったと感じる。参加レポートを記入した時点から改めて薬学図書館としての役割とは何だろうか、それは果たされているのだろうかと日々考えてきた。今回学んだ事柄を今後の業務に活かし、問題意識を失うことがないようにしていきたい。

最後に、当番館の国際医療福祉大学の皆様、充実したプログラムをご用意いただいたご担当の皆様に心から感謝を申し上げます。

(原稿受付け：2011.10.5)